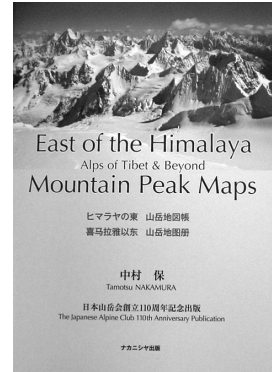

 新刊紹介

East of the Himalaya Alps of Tibet & Beyond Mountain peak Maps ヒマラヤの東 山岳地図帳

中村 保 著
 (日本山岳会創立 110 周年記念出版)
 ナカニシヤ出版
 333 頁, 10,000 円 (税抜)
 ISBN : 978-4-7795-0994-0



新刊紹介なのにはじめから自分のことで恐縮だが、今私は、昨年発表したアジア高山域の水河インベントリ (台帳, Nuimura *et al.*, 2015) の修正を進めている。一昔前は水河インベントリといえば、水河の位置、面積、高度のみが記載されたリストであったが、現在では、GIS (地理情報システム) 上で衛星画像の水河の輪郭をなぞるか、水河域を自動抽出することで作られ、一つ一つの水河の位置と範囲の情報が含まれている。基本的に衛星の可視画像を参照するため、水河の輪郭がはっきりと分かる、雲も積雪も無い良質な画像の有無がインベントリの精度の鍵となる。ここ数ヶ月で水河インベントリの修正は最終段階に入ったが、「ヒマラヤの東」の地域は良質な衛星画像がなく、雲に覆われた画像からすき間に見える水河を拾っていくため、非常に時間とストレスのかかる地域であった。つまりそれくらい、「ヒマラヤの東」はアジアの他の地域と比べると、天気が悪く、降水量が多い地域なのである。前置きが長くなったが、そんな中、この本に出会うことが出来たのは、なんと絶妙なタイミングだった。

この本の示す「ヒマラヤの東」とは Nam Co の位置する念青唐古拉山脈 (Nyainqen Tanguulha Shan) の東から、Kangri Garpo を経て、雄峰、梅里雪山、ミニヤコンカ、玉龍雪山を含む横断山脈までを指す。本書の中での説明にもあるが、この地域の中でも念青唐古拉山と Kangri Garpo は 1993 年に中国登山協会の史占春の著した「中国登山指南」では全くの空白域であった。また 1978

年から 2002 年にかけて中国人研究者が作成した中国国内の水河インベントリ (バージョン 1, Shi *et al.*, 2008, 2009) では、この地域は季節積雪を含む部分が水河とされており、水河面積が過大評価されていることが知られていた。最近公開されたバージョン 2 でも、良質な衛星画像がないことを理由に、横断山脈周辺の改訂を断念している (Guo *et al.*, 2015)。

このように、私は衛星画像を通して「ヒマラヤの東」を見ていたため、この本の、紺碧の空をバックにすっきりと立っている岩壁や峻峰の写真が多数載っているのを見て、自分が抱いていた雲や雪に覆われたこの地域に対するイメージとの間に大きなギャップを感じてしまった。このことからつまり、著者はこれだけの「絵になる写真」が撮れるよう、雲間のシャッターチャンスをつかむため、長い時間をかけて彼の地を踏査したのだと想像でき、改めて感心した。

著者の中村保氏はもともと一橋大学山岳部であり、現在は日本山岳会やその他のアルパインクラブの名誉会員となっている。一橋大学卒業後はブランドビジネスに携わり、海外駐在の期間は 20 年余り。そして 1990 年から 2014 年にかけて、37 回の踏査によってこの本にまとめた。足かけ 25 年であるから 1 年間に複数回行っていることも少なくない。この「ヒマラヤの東」にかける熱意のものは何であったのか？ 就職直後に南米のアンデスに遠征をし、ペルーやボリビアの山々を初登頂しているが、1990 年以降は「ヒマラヤの東」の踏

査一筋である。本書の中では「未知の世界」「地理上の空白部」との説明から入っているが、原動力はこの一言に尽きるのだろうか？

氷河の現在と過去の比較写真は、多くの教科書、メディアに取り上げられたように気候変動を視覚的にとらえることのできるものである。しかしこれまでは、過去に撮られた氷河の写真は視覚に訴えるのみで量的な評価が出来ず、氷河変動を研究対象とする立場からは大変物足りなかった。しかし最近劇的に開発が進んだ Structure from Motion 技術により、複数の斜め写真からでも数値標高データを作る事が可能になった。過去（と現在）の氷河の写真から数値標高データを作成すれば、氷河表面の比高差が算出できる。こうして過去の写真は科学的にも宝の山となった。この本に載せることの出来なかった写真も、近い将来その真価を発揮することを期待する。

さてしかし、この本を読み進むうちに将来への不安も少々感じてしまった。「辺境は遠ざかる」という章で著者は、「開発にともない、辺境は（近くなって辺境でなくなってしまふことはなく）遠ざかって行く」と記している。これは近年の踏査で実感したそうで、現地のチベット族の生活も近代化の波におされ、車を使わない馬や徒歩でのトレッキングをいやがるようになり、著者が行きたい地域へのアクセスがより難しくなったとのことである。数十年後、現地に赴くことは可能なのだろうか？雲に覆われた衛星画像を見るだけで終わってしまいはしないだろうか？

本書は、日本語のみでは無く、英語と中国語も

並記しているので、日本国内に終わらず、より多くの読者を得ることができただろう。ここでは氷河の視点から紹介させてもらったが、2015年までの記録も含まれており、彼の地における探検や登山の記録が丹念にまとられている。また今後氷河インベントリの各氷河に名前を入れる作業が出てくるであろうが、本書が参考になることは間違いない。

ともすれば雲に隠れた氷河の輪郭を、まあ良いかとあきらめてしまいそうになるが、この本に出会って叱咤激励された気分である。しばらく衛星画像で真上から氷河を見ていたが、斜め写真の氷河も興味をそそる今日この頃である。

文 献

- Guo, W. and 10 others, 2015 : The second Chinese glacier inventory : data, methods and results. *J. Glaciol.*, **61** (226), 357-372.
- Numura, T. and 12 others, 2015 : The GAMDAM glacier inventory : a quality controlled inventory of Asian glaciers. *The Cryosphere*, **9** (3), 849-864.
- Shi, Y., Liu, S., Ye, B., Liu, C. Wang, Z., 2008 : *Concise glacier inventory of China*. Shanghai Popular Science Press, Shanghai.
- Shi, Y., Liu, C., Kang, E., 2009 : The Glacier Inventory of China. *Ann. Glaciol.*, **50** (53), 1-4 (doi : 10.3189/172756410790595831)
- 史 占春, 1993 : 中国登山指南. 成都地図出版社, 220 頁.
(名古屋大学 坂井亜規子)
(2016年2月26日受付)